

歴史エッセイ 『昭和天皇独白録』を読んで

—— 昭和天皇沈黙の鍵 ——

土田 良吉 (93才)

平成三十年五月二十九日(火)早朝のこと。六時からのラジオお早う番組で突然のニュースに一瞬、耳を疑った。「…近く一七〇〇にも及ぶ『昭和天皇独白録』がホームページに流れます。是非、多くの人に読んでいただきたい」

と、ちようど、数日前からマリコ・テラサキ・ミラー著(遺産の重み)「昭和天皇独白録・寺崎英成・御用日記」を読んでいたときであった。終戦直後の1946(昭和二十一年、昭和天皇の御用掛としての寺崎英成氏が記した『昭和天皇独白八時間』に違いない。

二十八年前の1990(平成2)年『文芸春秋』十二月号に初めてその全文が発表され、大きな話題となった。不明にも知らずにいたところへ東京練馬区の従弟、医師のY氏からその十二号誌が送られてきた。「父がシベリアで九死に一生を得たあの戦争の真相が分かった。ベストセラードでもう読んだと思うが」と、感動を籠めた添え書きがあった。貪るように読み耽った。次々に新事に触れ、私の戦争観はたちどころに一変した。

早生まれの私が小一(六才)の九月に満州事変、中一(十三才)の七月に日支事変が勃発した。旧中五(十六才)の卒業間近の十二月八日真珠湾攻撃。十二月二十六日繰り上げ卒業。新設の北海道計根別飛行場の軍属(十八才)として勤務、二十才の四月に航空師団第一氣象連隊に入営、同八月終戦。徹底した軍事教育をうけ教育勅語や軍人勅諭を金科玉条として戦ったが必勝の信念空しく敗戦。多くの青春が皆そうであったように、一身を国に捧げた純粋な体験は語るに忍びない!

戦後の世情は厳しく、敗者意識に打ちのめされ暫くは戦争のことは何も思い出さたくない時代があった。東京軍事裁判然り。「あの悪夢の総てが…それも勝者、敗者の別なく真相が判明するのは五十年後のことだろう」と、開き直り生き抜くことで精一杯だった。当時の国民は皆作家の司馬遼太郎が己の戦争体験から謎めいた言葉を残した通り「魔法の杖」に翻弄された戦争の虚しさに萎れていた。自分にとって、半世紀以上も経ったいま、天皇ご自身のお言葉が詰まっている。「独白録」を読むこと

が出来るのは天命とは言え長寿の賜物である。

前述のニュースの通り、ホームページで『昭和天皇御白録』がより多くの大衆に読まれればこの上なく良いことだと確信している。昭和天皇は一貫して

「立憲政治を尊重することが自分の考え方の基本であった。自分自身の決断を下したのは2回しかない。一・二六事件のときと、終戦のときである」と主張しています。

巷間言われたように戦争の渦中で統帥権のトップにあらせられた大元帥陛下が何故「沈黙」を続けられたのか、そのカギを明かす一章が茲に載っています。

参考になればと思い、それらを焦点に読後感を述べてみます。拙い文ですがご一読下されれば幸いです。

(一)

明治三十八(一九〇五)年、

わが国は日露戦争に勝利し、満洲南部の鉄道の経営権のほとんどを獲得した。それに伴い鉄道の安全を守るために、鉄道守備の軍隊駐屯権を得ることが出来た。之が、それまで全く関係のなかった満洲に軍隊を派遣するスタートになった。

大正八(一九一九)年

守備隊は関東州旅順・大連に司令部を置いた。関東軍

と呼ばれ、満洲はソ連の南下を防ぎ日本本土を守るための一番先端の防衛線「生命線」になった。

昭和元年(一九二六)年、二十四歳で即位された天皇の昭和は激動の幕開けで始まる。

昭和三(一九二八)年、

満洲の奉天近くで張作霖が爆殺されるといふ事件が勃発し、事件の責任を巡って大問題が起きた。以来、陛下には御前会議においてさえ太平洋戦争開戦の時を除き、沈黙を続けられたという。

そして昭和丸は陛下の好まざる方向へと突き進んでしまふのであった。軍の統帥権の独立という最高のお立場にある大元帥陛下が何故、沈黙を守られたのか。何とも信じ難い。

(二)

張作霖の爆殺事件こそ昭和十五年戦争のきっかけなのである。その頃満洲の大軍閥として君臨していた張作霖が、蒋介石の国民党軍と衝突して敗れ、北京から奉天に向かつて逃げているときのことであった。

彼と日本軍とは暫くの間、互いに利用し合う蜜月状態の時代もあったが権威を振りまわして日本軍の役に立たなくなり始めると、この時点で、関東軍の参謀らは彼を

亡きものにしようと考えだした。張作霖の列車が奉天付近にたどり付いた時、線路に仕掛けられた爆弾で張作霖は爆殺されてしまう。関東軍では自分たちの陰謀をかくし、現場で死骸となって見つかった阿片中毒の中国人の仕業にするつもりであった。しかし現場の状況から日本軍の謀略であることが次第に明らかになってくると、それに最初に気づいたのは元老の西園寺公望であった。

「さては陸軍がやったな」と感づき、

「けしからん。世界的に公にはできないが国内ではきちんとケリをつけておかないと将来的にいい結果をもたらさない」と、時の内閣総理大臣で元陸軍大臣の田中義一をよびつけた。

「政府として、もしこの犯人が日本人であるならば厳罰に処せねばならない」と、申し渡した。ところが田中首相は「はいわかりました」と言うだけで一向に実行にうつす気配がない。西園寺公に度々急かされたため、事件から半年以上も経った十二月二十四日に漸く天皇に会いに行った。

「この事件は世界的にも大問題ですので陸軍の手がのびているということであれば、犯人は厳罰に処するつもりでございます」と、奏上した。天皇は

「陸軍部内の今後の為にもそういうことはしっかりやる

ように」と、申された。年が明けたが田中首相は知らん顔をしている。そうこうしている内に事の真相が暴かれはじめた。事件の首謀者は関東軍参謀の河本大作であることもはつきりしてきた。

昭和四（一九二〇）年五月六日、事件から一年近く経ってから田中首相は、遂にやむを得ず再び天皇のもとに行った。

「実は、これは陸軍がやったものではありません。陸軍とは一切関係のない話であります」と、報告した。それは「表向き陸軍と手を組んでいた張作霖を警備する義務がある、という点では仮に関東軍に責任が生ずるかもしれませんが。であつてもほんの軽い行政処分ですませたい」というわけであった。

天皇はびつくりした。最初、田中首相は

「これは陸軍の謀略かもしれないので犯人は厳罰に処します」と、言っておきながら約半年以上もすつぽかした挙句に一切関係ないと言うのだから、二十六歳の若い天皇はかんかんになって怒ります。『録白録』によると

「田中は再び私の処にやって来て、この問題は有耶無耶の中に葬りたいということであった。それでは前言と甚だ相違したことになるから、私は田中に対し前言と話が違うではないか。辞表を出してはどうかと強い語気で言

った」

「こんな言い方をしたのは、私の若気の至りと今は考えているが、そういう言い方をした」と、こう天皇は回想している。田中首相は恐れ入って

「その事については、色々とお説明申し上げます」と言うとうと、ご立腹の陛下は

「聞く必要はない」と、奥にお入りになったそうである。天皇の怒りを受け、西園寺さんらトップ三人の側近は即刻会議を開き相談した。

「田中首相の責任をあくまで追及すると、政変の起きることも予想される。政治上有り勝ちなことである。大元帥陛下と陸軍の関係上、内閣引責後の前後処置を予め考慮しておく必要がある」と、大元帥陛下と陸軍とがギクシャクするのを心配した。

側近たちは田中総理大臣が前言を、それも天皇に対しあつさり翻した、ということは臣下としてはあつてはならないことであり、あくまで責任を追及するという態度で一致した。ところが重臣たちの動きを察知した陸軍は黙ってはいないとばかりに策動をはじめた。

後の陸軍を背負って立つ、黒木、永田らの有能な中堅クラス九名が二葉会というグループをつくり

「張作霖爆殺事件を何とか有耶無耶にしよう」と、相談

しているわけだから、陸軍の長老である田中義一首相はどうにも動けず言葉を濁さざるを得なかったのである。

(三)

六月二十七日に田中首相が天皇に最終報告をする事になった為、牧野内大臣が念のため側近の先の結論を再確認したところ西園寺さんが、突然意見をひっくり返してしまった。

「天皇自ら総理大臣に辞めると言うなど、憲法上やっつてはいけないことである。私は賛成した覚えはない」と。内大臣は仰天してしまふ。つまり西園寺公は

「天皇は、総理大臣の進退について余計な事を言つてはならない。明治天皇の時代から未だかつてその様な例はない。大間違いである」と、言つて譲らなかつた。

この意見が鈴木侍従長の耳に入らないまま二十日になつた。天皇は田中総理大臣に対し「責任をはつきりせよ辞めたらどうか」と言つたようである。

翌二十八日、白川陸軍大臣が天皇陛下に陸軍の処分案を報告した。それは行政処分であつて厳罰ではなかつた。張作霖を守れなかつた関東軍司令官は予備役に、河本は関東軍参謀を辞任など、軍法会議で罪を問うことは一切せず、書類上の決裁で済ませた。これを聞いた天皇は再

び田中首相を呼びよせた。

「一体どういうことなのか。これで事が済むと思うのか。お前は辞めるように」と、今度ははっきり告げたのである。田中首相は逃げるようにして辞去した。五日後の七月二日、田中内閣は総辞職した。田中はその後まもなく亡くなった。この時のショックが心臓に響いたとも自決も囁かれた。『独白録』によれば

「もし軍法会議を開いて訊問すれば河本は日本の謀略を全部暴露すると言ったので軍法会議は取り止める事になったというのである」と天皇は記憶している。

軍法会議にかけられたら、河本大作は全部ばらすつもりだという。そうなれば陸軍中央がみんなグルだったと知れて日本陸軍はガタガタになってしまう。田中首相は、陸軍の突き上げにあつて自ら倒れてしまった。結果として、陸軍は「一連のことは宮中の陰謀であり、側近が確なことしか天皇に進言しないから、このようなどんでもないことになる」と、吹聴してまわった。以降、天皇の側にいる重臣たちを敵と看做すことになり重臣たちを軍部は「君側の奸」と呼ぶようになった。

天皇は結論として「この事件以来、私は内閣の上奏する所のは、たとえ自分が反対の意見を持っていても裁可を与えることに決心した」

「重臣たちへの恨みを含む一種の空気が出来てしまったことが、後に二・二六事件を引き起こす原因になったのかもしれない」と、言っている。元老の西園寺さんに可なりきつく言われたのだろう、西園寺公は次のように述べている。

「立憲君主制においては、国務（政治）と統帥（軍）の各最上位にある者が完全な意見の一致をもって上奏してきた事は仮に君主自身、内心において不賛成であっても、君主は之に裁可を与えるのが憲法の常道である」と、昭和天皇はこれを受けて、「自分の意見を言ったばかりに内閣総辞職、しかも総理大臣が亡くなるということという混乱をもたらした。そういうことを天皇自らの指図でやってはいけない」

「これからは閣議決定を重んじ、内閣の上奏を拒否しない事を今後の方針にする」と、つまり「君臨すれど統治せず」これが立憲君主国の君主の在り方だと御自ら考えられたのである。それ以後、巨大な渦の中にあつて宸襟を悩まされた天皇は沈黙を続けられたのである。

歴史的な張作霖爆殺事件の意味は事の大きさに以上にここにあつた。昭和史はここから始まり、遂に昭和六年九月、満州事変に突入するのであつた。

『独白録』の中で天皇は「御前会議というものは、おか

しなものである。枢密院議長を除く他の出席者は全部、すでに閣議または連絡会議において意見一致の上出席しているので、議長に対し反対意見を開陳し得る立場の者は枢密院議長ただ一人だけであって、多数に無勢、いかんともなし難い。まったく形式的なもので

「天皇には会議の空気を支配する決定権はない」と、御前会議と言うものについてこう回想しておられる。

次は付記の中からの抜粋で、昭和の開幕から太平洋戦争の開戦までに御前会議は八回開かれている。

- 第一回・昭和十三年 一月三十日、南京攻略後
- 第二回・昭和十三年十一月三十日、漢口攻略後
- 第三回・昭和十五年 九月十六日、日独伊三国同盟の

締結決定

第四回・昭和十五年十一月十三日、日中戦争持久戦
第五回から第八回までの四回は総て昭和十六年に集中し、昭和十六年九月六日天皇は対米戦争の計画につきご下問、この時だけは強くご意見を述べられ、軍司令部を厳しく追及された。他の七回は何れも無言の内に国策を裁可され戦争遂行に至ったのである。

最後に天皇は『太平洋戦争を拒否すれば日本国は大混乱となり日本は滅びたであろう』と述べられている。過激派のクーデターを恐れ、強いご意見があったにも係わ

らず、述べるにとどまった天皇の苛立ちと苦悩は如何ばかりであつたろうか！ 注意深く読めば読むほど歴史的事実から受ける感動で身の震えを覚える。（歴史研究家半藤一利）。

1989（昭和六十四）年一月七日昭和天皇が亡くなった朝、竹下内閣総理大臣の謹話がでた。いわば天皇の生涯に対する政府の公式な総括で次のような内容であつた。「…この間、大行天皇には、世界の平和と国民の幸福をひたすら御祈念されてこられました。お心ならずも勃発した先の大戦において、戦禍に苦しむ国民の姿を見るに忍びずとの御決意から、ご一身をも顧みることなく戦争終結の御英断を下されたのであります。このことは戦後全国各地をご巡幸になり、廃墟にあつて、なす術をしらなかつた国民を慰め、祖国復興の勇気を奮い立たせて下さつたお姿とともに、今なお国民の心に深く刻みこまれております。爾来我が国は、日本国憲法の下、平和と民主主義の実現を目指し、国民のたゆまぬ努力によつて目ざましい発展を遂げ、国際社会において重きをなすにいたりました。これもひとえに、日本国の象徴であり国民統合の象徴としてのその御存在があつたればこそこの感をひとしお強く抱くものであります。云々。

要するに天皇はつねに世界の平和を記念し国民の幸福

を念願したこと、さきの大戦は天皇の意思に反したものである、その後の日本の経済発展は天皇のお蔭であるということを手帳している内容であった。

「昭和天皇独白録」は松平宮内大臣ほか寺崎英成氏を含む五人の側近が、昭和二十一年の三月から四月にかけての四日間、計五回にわたって昭和天皇から直々にお聞きし纏めたもので、天皇の語りのまま「私は」と言う一人称で記録されている。著者の寺崎英成氏は、昭和天皇と連合国軍司令部(GHQ)のダグラスマッカーサー司令官との会見の通訳も務めた。

寺崎氏の弟寺崎平(たいら)氏はこう語っている。

「ソ連は天皇を戦犯にしようとしていたが、アメリカは反対だった。兄は総司令部が天皇を守る方針を堅持するよう、ずいぶん運動したと聞いています。宮内庁上層部の意向がはたらいていたようです。そのことで兄は心身ともに消耗し尽くしたのです。後に兄が亡くなったときに(昭和二十六年八月享年五十才)弟思いの長兄の太郎は、宮内庁から届けられた花を自分の手では受け取らなかったほどでした。もっとも兄(英成)としては、その人生の中でいちばん仕事に生き甲斐を感じていた時期であったと思います。(柳田邦男『マリコ』より)

最後に、寺崎氏の「御用掛日記」原文の冒頭に掲げている『海舟座談』の一節を記しておこう思う。

「それ人生は海の如し、巨舟之を渡る。たとひ能く痕跡を消すと雖も、豈亦餘波の白鷗を浮沈せしむるものなからんや」日記を書こうとしたときの寺崎の心境でもあったのでは！(歴史研究家半藤一利)

「昭和天皇独白録」は国外でも「二十世紀の日本の歴史を理解する上での鍵となる」と定評がある！

昨年2017年十二月、ニューヨークで鉛筆等で記録された「昭和天皇独白録」の原本がオークションにかけられ、査定価格の2倍の二十七万五千ドル、約三千九十万円で愛知県西尾市出身の美容外科高須クリニク高須克弥院長が落札した。日本に取り戻すのは国民の使命。秋篠宮ご夫妻の長男悠仁さま(中学一年生)にプレゼントしたい意向で皇室の図書館か悠仁さまの目に付きやすいその様な施設に寄付したいと。宮内公文書館では正式に寄贈を受け入れると発表した。(ホームページより)

平成三十年五月三十一日謹記